堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

史上最長の漂流生活「船長日記」残す　小栗重吉

小栗重吉　尾州廻船の船頭として江戸交易

天明５年 (1785) 三河国佐久島の百姓の次男として誕生。後に尾張国半田村の百姓の養子となる。堀川沿岸の納屋橋近くには廻船問屋が軒を並べ、江戸との交易を行っていた。

長じて、船頭重吉は納屋町の廻船問屋時田屋に通い奉公をしていた。同じ納屋町の廻船問屋小嶋屋所有の督乗丸（千二百石積み≒120トン・乗組員14名）に雇われ船頭として乗り、文化10年 (1813)10月尾州の御廻米（ごかいまい）などの商品を積んで師崎を出帆した。江戸からの帰還途中の11月３日、御前崎沖で嵐にあい遭難し、乗組員の１人が死亡した。その後、史上最も長期にわたって漂流をしたが、アメリカ・ロシアを経て奇跡の帰国、藩から名字帯刀を許され水主の職を得るも早々に辞職して亡くなった乗組員の供養に余生を捧げる。その間に『船長（ふなおさ）日記』『ヲロシアの言』を残した。

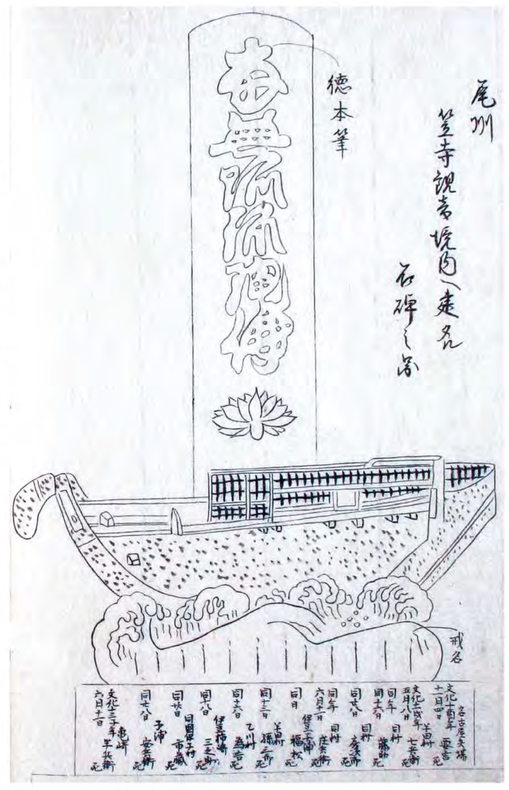
漂流記と乗組員慰霊碑を残す

文化12年2月14日米国カリフォルニア州のサンタバーバラ（当時スペイン支配地ノーハイスパニヤ）付近の洋上でロンドンの商船ホーストン号に救助された時には、生存者は重吉と音吉、半兵衛の３名であった。

484日の漂流から救われた重吉が、ホーストン号上で初めてお互いの国に関する理解を得る場面が、『船長日記』（小栗重吉述・池田寛親筆）に次のように記録されている。

「口をさしてたべ物は何をたべるぞと聞きし様子なれば、米を見せて日本人と知らしめたくも米は一粒もなし。ふと思い出して懐中する伊勢大神宮の御洗米を取出し飯にたきて食する形をして、それも今は無しという」

「日本の絵図いとくわしくかきたるをのべてベケツ（船長）初め三人にて図をさし示しジッパンジッパンといえども何のことかもしれず。又指にて図をさし教えてミヤコ、キウシウ、ヱド、スルガというを聞く。さては日本人にていずくの人にかと尋ぬるならんと思い、こなたよりも指もて尾張をさして江戸を引き来たり江戸より又帰り来たる駿河の所にて口にて風のふく様をして南へ吹き流されたる手品をして見せたれば三人はわかりたる気色なり」



上：成福寺に移された廻船形慰霊碑
下：笠寺観音境内に建立した碑設計絵図
（早稲田大学附属図書館蔵）

ホーストン号はサンタバーバラで交易品の調達を終え３人を乗せてロシア領（現アラスカ州）シトカに寄港後、ロシア・カムチャツカのペトロパブロフスクに移送した。そこは文化９年 (1812) に高田屋嘉兵衛が拿捕され、ゴローニン事件解決に絡んで松前に帰還を果たした地であった。英国商船による英露交易とロシア皇帝の日露抑留者交換策が繋がって、重吉らは奇跡的に帰国できる身となった。だが露船パヴェル号で文化13年７月９日択捉（エトロフ）島に着く前の６月に半兵衛が病死。その後、松前、江戸で事情聴取を受け、14年４月に身柄を尾張藩に移され、５月に帰郷を果たした。

文政元年 (1818) 苗字帯刀を許され、小栗姓を名乗る。文政５年新城藩家老・国学者の池田寛親の口述筆記にて『船長日記』を完成。７年乗組員の慰霊碑「船頭重吉の碑」を笠寺に建立、嘉永６年 (1853) に死去。享年69歳。安政年間 (1854～59) 成福寺の和尚が譲り受け、境内に手厚く供養し、現在に至っている。

『船長日記』と船頭重吉の碑

『船長日記』……積み荷の大豆をきな粉にしたり、魚を釣ったりして飢えをしのいだこと、同乗の乗組員が壊血病や栄養失調で次々と命を落とす様子、救助後のアメリカにおける生活などを記録、鎖国下に数少ない海外見聞録であると共に、長期にわたって極限状態に置かれた人間の心理が描かれた文学的価値の高い資料。そこにはロシアでの生活用品を描いた色絵と共に廻船の形をした慰霊碑の設計絵図（右上の引用図）も掲載されている。

船頭重吉漂流略図

廻船形の慰霊碑が移された成福寺

エピソード……重吉は，船上で死んでいった仲間を忘れることができなかった。海外情報の流布は禁止されていたが竹腰家老が容認、自らの出版物を売り歩き資金を集め、文政７年頃台座が廻船の形をした慰霊碑を笠寺に建立。帆柱の部分には「南無阿弥陀仏」の文字が、また台座には死亡した乗組員の名が刻まれている。